

[研究ノート]

## 郷土玩具の文化継承を目的とした地域コミュニティの構築

—浜の市の「一文人形」を事例に—

Cultural inheritance and regional vitalization in a local community  
—A case of *Ichimon-ningyo*(a folk toy) at Hamanoichi in Oita city—

西 口 顕 一

Nishiguchi Kenichi

### 1. はじめに

大分県大分市生石・浜の市地域には、秋の風物詩として古くから市民に親しまれてきた柞原八幡宮の仲秋祭「浜の市」がある。江戸時代には隆盛を極め西日本三大市と称されたこともあるが、時代と共に市（いち：ここでは浜の市を指す）の規模は縮小し、市を象徴する郷土玩具「一文人形（いちもんにんぎょう）」や名物菓子「しきし餅 [注1]」もまた、販売店の減少により姿を消そうとしている。

今回テーマとする郷土玩具は、少人数での維持管理が可能のため生産規模や技術継承を広げにくく、伝統工芸のようにその地域を代表する文化産業へと発展し難い側面がある。さらに製作者が高齢化している現状にあり、廃絶に向かうものも多いとされる。また、地域住民の日常生活や習俗において郷土玩具と接する機会は減り続け、多くの郷土玩具が地域から遊離した状態になっていると指摘されている [注2]。

本研究では、前述の理由から存続危機にある郷土玩具、中でも本学の所在地でもある大分市に伝わる「一文人形」を対象とし、地域の文化財の保存と、生石・浜の市地域における伝統的要素を継承する習慣やコミュニティの構築を目的として進めることを予定している。またコミュニケーションデザインの視点から、郷土玩具が地域を象徴するキービジュアルとして定着し得ないか、さらに郷土玩具の視覚的要素を用いた民芸や名産品への展開、観光資源等に発展し得ないかを検証する。全国で同様に姿を消そうとしている郷土玩具を存続させる手段・試作の一つとしても考察したい。

研究内容は大きく3つに分け、①地域資源として「浜の市・一文人形」の文化継承、②「一文人形」の歴史と造形における調査、③「一文人形」をモチーフとしたデザイン的施策による文化財存続の模索とし、①③を実働しながら②を考察する。

本稿では、上記①の観点から、伝統文化を育むコミュニティの構築を目的とし、2018

1) 「しきし餅」とは、米の粉を水で溶き、丸めてセイロで蒸し、更に搗いて伸ばし、切って餡子を包んだ座布団のような形をしたもの。表面に縞模様があり、中央には赤い点がある。

2) 岡本憲幸：「郷土玩具と地域像－岡山県美作地方の泥天神の現在－」p64,p67-68,人文地理 61(3),249-265, 2009

年度開催の浜の市にて実施した「一文人形の絵付け体験ワークショップ」の実施概要と成果について報告する。

## 2. 柞原八幡宮について

大分県大分市西部八幡地区には、平安時代初期、豊前国（ぶぜんのかくに）の宇佐神宮より分霊された事が始まりとされる「柞原八幡宮 [注3]」がある（図1）。「豊後国一宮（ぶんどこくいちのみや）」として信仰を集め、特に豊後国司や豊後国守護の大友氏、府内藩主達によって手厚く保護されていたようである。宇佐神宮から八足の八幡神の衣がたどりついたという伝説があることから宇佐神宮との関係が深く、南から楼門と回廊、拝殿・中殿・本殿を一直線に並べる建物配置や、西門を大きく作る構造などは両神宮共通である。特に本殿は、宇佐神宮で成立した八幡造が地方に伝わり、柞原八幡宮独特の形態がある事が評価され10棟が平成23年（2011）6月20日に国の重要文化財に指定されている。その柞原八幡宮から北東に向かって直線距離約3kmのところには柞原八幡宮仮宮があり、ここが「浜の市（仲秋祭）」祭礼の場である [注4]。（図2）



図1 柞原八幡宮（大分市八幡地区）



図2 柞原八幡宮 仮宮（生石港）

## 3. 放生会と浜の市（中秋祭）

浜の市は「生石浜（いくしはま）の御放生会（ごほうじょうえ）」を由来とし、古くから大分市民に親しまれてきた。放生会の始まりについては、『柞原八幡宮志』によると仁寿3年（853）とされるが、文献においては、『柞原八幡宮文書（久安元年／1145）』の「宮師僧院清解状（みやしそういんせいげじょう）」に放生会の記述が最初に登場する。また、同資料の正慶元年（1332）の「由原宮年中行事次第」には8月に放生会が行われ、「十四日 御行幸」「六月廿七日（にじゅうしちにち） 濱殿御行幸（はまでんごぎょうこう）」とあることから、この頃には濱殿すなわち、仮宮へ御行幸が行われていたことが予想される [注5]。

この放生会の賑わいを見て、寛永13年（1636） [注6] 当時の府内藩主日根野吉明（ひ

<sup>3)</sup> 柞原八幡宮（江戸時代までは由原社、由原八幡宮。明治以降は「柞原」が呼称）

<sup>4)</sup> 大分市：「歴史的風致維持向上計画令」,第2章,2(1),p65-67,p69,73-74, 2019.6

<sup>5)</sup> 宗教法人柞原八幡宮：「柞原八幡宮 建造物調査報告書」,p110, 2010.3

<sup>6)</sup> 「浜の市」の始まりは寛永13年とされているが、寛永12年・16年の説もある。

ねのよしあきら）が城下繁栄のため、旧暦8月11日から7日間（後に8月11日から9月1日までの20日間）新市を開いたことが「浜の市」の起源とされる。この間、府内城下及び、東・西新町では「飯米類ならびに当前入用の品（日用品）」以外の店頭販売は禁止されていたため、商人のほとんどが浜の市に出店することとなっていた（府内藩の記録）。仮宮周辺では、府内城下町を模して釜屋町・魚町・穀物町、桶屋町、堀川町、田町、横町等東西に通じる町筋が造られ、城下商人以外にも、他国の商人300軒前後が小屋掛けの商いをしていたようだ。その他、芝居や花火、富くじなども催され大変賑わいをみせ「豊後の人市」「天下市」と呼ばれ、讃岐金刀比羅の金市、安芸宮島の舟市と並び、「西日本三大市」と称されたとされる〔注7〕。

賑わいを見せていた浜の市は、17世紀半ばの幕藩体制により城下の町の経済が日常的に発展したことで、期間が限られている市への出店メリットがなくなり、結果、規模縮小を余儀なくされた。そして、かつては藩によって統括されていた市の意義は徐々に変化し、浜の市は「祭礼市」となった〔注8〕。明治時代には神仏分離令のため、放生会は「仲秋祭」と改称されたが、浜の市の愛称は名残として現在でも用いられている。現在の祭礼日は、9月14日から20日であり、かつての市日が旧暦8月であったことを引き継いでいる。（図3）（図4）

前述の理由から現在のメディアでは、放生会、仲秋祭、浜の市の意味が混同され同義に用いられることもあるが、それぞれの開始時期や起源、目的が異なっていたことがわかる。浜の市・一文人形の歴史を辿る上で、また地域の歴史や文化を認識する上での重要な手掛かりとなった。



図3 浜の市（仲秋祭）期間中の仮宮境内の様子



図4 仮宮境内に設置される一文人形の装飾

#### 4. 郷土玩具「一文人形」

浜の市の名物として、今回題材とした「一文人形」がある。一文人形とは、長さ20cmほどの竹串の先に役者や武者、町人等の頭部（縦4～6cm）がつけられたものであり、郷土玩具の中では首人形に分類される。人形の顔を彫った型板（素材は時代によって異な

<sup>7)</sup>大分市：「大分市史 中巻」,p502-503, 1987

<sup>8)</sup>大分市：「大分市史 中巻」,p508-509, 1987

る)に粘土を指で押し込んで固め、泥絵具を塗っていたとされる。裏面は平らで着色されていない。当時は藁苞(わらづと)に挿し、軒先に下げて販売されていたようだ [注9] (図5)(図6)。大分市歴史資料館によると、かつては収穫期前の農家 [注10] が浜の市で販売するために作られていたとされる。また串を藁に挿した束が一文(価格単位)で売られたことから一文人形と呼ばれ、子ども達が和紙等で体(衣装)を作り、着せ替え遊びに使われたとされている。



図5 復元された一文人形(正面)



図6 復元された一文人形(裏面)

ぬ	り	ち	ど	へ	に	ほ	ろ	い
き	五	茶	青	大	赤	紙	き	あ
る	右	か	か	大	大	紙	つ	ね
	衛	ぶ	ぶ	大	大	紙	ね	き
	門	ど	ど	大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	つ
				大	大	紙	つ	ね
				大	大	紙	ね	き
				大	大	紙	き	

関する文献調査だけでも、起源や、製造方法、製作者、復元の経緯等文献によって記載内容が異なるため、今後の調査が必要である。

復元された一文人形の頭の裏面には、「いろは文字」が記されており、それぞれの名が分かるようになっている。い（あねさん）、ろ（きつね）、は（紙えぼし）、に（赤えぼし）、ほ（大えぼし）、へ（大顔）、と（青かぶと）、ち（茶かぶと）、り（黒かぶと）、ぬ（五右衛門）、る（さる）、を（巡査）、わ（牛若丸）、か（赤鬼）、よ（青鬼）、た（大鬼）、れ（大黒）、そ（五郎）、つ（十郎）、ね（おかみさん）、な（足軽）である。（図7）

この一文人形は浜の市の期間中に販売される際物であった。しかし、柞原八幡宮仮宮の門前町の路面で唯一、一文人形の販売をしていた雑貨屋「宮喜屋商店（図8・9・10）」が、2017年を最後に閉店（販売終了）した。同年に宮喜屋商店を訪問した際のヒヤリングによると「従来的一文人形以外にも、首部分から竹ひごを外し、手のひらサイズの竹製の箕や木板に貼った壁飾り（図11）として販売するなど工夫もしたが、ニーズの変化により売れ行きは今一つであった。たまに懐かしんで手にする人や、郷土玩具に興味がある地域外の愛好家が購入する程度。」との事であった。郷土玩具としての一文人形は現代の子どもにとって遊び道具には至らず、地域内外の一部の愛好家のみが購入するに限られてしまった。

また2018年度以降、仲秋祭期間中の販売は仮宮境内のみとなった（2020年度の浜の市



図8 雑貨店・宮喜屋商店（外観）

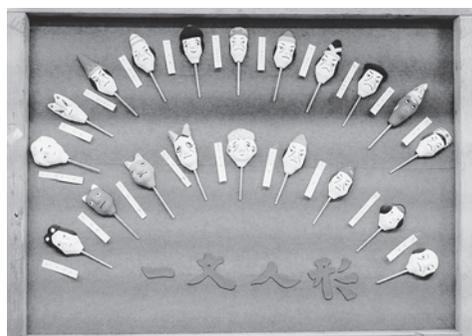


図9 雑貨店・宮喜屋商店店内に飾られる「紙えぼし」を除いた20点（非売品）



図10 店内で販売されていた一文人形。1本400円（2017年）

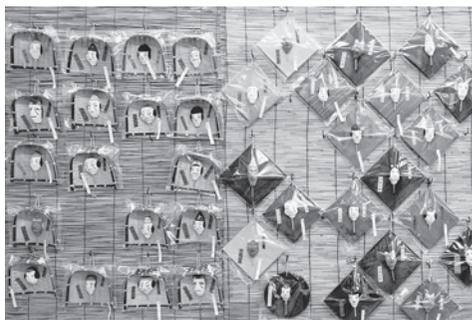


図11 店内で販売されていた一文人形からの展開商品の展示

は新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催中止)。複数の文献に渡り、通年オンライン販売されているとの記載も見受けられるが、2020年12月現在該当するサイト等は確認できない。制作年数が古いものがネットオークション等に出品されることは稀にあるようだが、基本的には豊泉堂にて受注生産の体制を取っているため、定常的に購入できるとは言いがたい。但し、大分市府内町にある「民芸の店 ぶん古(ご)」には注文を請け卸す場合もあるようだ。

## 5. 活動内容

### 5.1. 柞原八幡宮訪問

2018年9月26日、大分市上八幡にある柞原八幡宮を訪問し、禰宜・長澤周一郎氏に柞原八幡宮と浜の市について、また一文人形に関するヒヤリングとワークショップの企画概要を説明した。長澤氏によると、浜の市の出店や催しについては、現在実行委員会を中心に計画、運営。会期中は神事も並行して実施している為、出店内容や催しまで全て管理する事は、人員や担い手不足もあり厳しい現状にあるようだ。そこで、本来の祭礼に加え、伝統的催しとして神楽や花火大会を実施し、さらに地域住民によるカラオケ大会や踊り等の各種イベントを付加することで、活性化を図っている。また、出店は代理業者に委託している為、市内の他の祭りと同類の一般的な露店が立ち並んでいるようである。実際の浜の市を数度訪問した印象では、祭礼を主とした伝統文化行事特有の真正性の風化が懸念された。

一文人形については、浜の市の名物として毎年仮宮の御守授与所にて販売されており、柞原八幡宮でも一部販売されていた。また、復元から現存する21体全ては揃っていないものの、宮内にて大切に保管されているものもあり、機会があれば復元種全てを揃えたいという意向も確認できた。今回の絵付け体験ワークショップの企画の説明を長澤氏に行ったところ賛同いただき、実行委員会での協議の結果実施の許可を得た。境内では机を設置し絵付けをするスペースが確保できない為、催しの一つとして神楽殿にて2時間程度の絵付け体験を試験的に開催することとした。長澤氏にはワークショップの会場となった神楽殿の手配と、ワークショップ内での浜の市と一文人形に関する講話に協力いただいた。

### 5.2. 豊泉堂訪問

2018年7月20日、大分県別府市小倉にある豊泉堂(郷土玩具作家宮脇弘至氏の工房)を訪問し、ワークショップの企画説明、絵付けの土台となる人形の提供依頼と制作・着彩工程についてヒヤリングを行った。豊泉堂は一文人形以外にも、福獅子や南蛮鈴など大分県にゆかりのある郷土玩具を復元している工房である(図12)。郷土玩具を製造するに至った経緯や人形に対する思いなども確認できた。浜の市でのワークショップや土台提供についての快諾を得ることができ、製造工程やワークショップを実施する上での留意点等の教示を受けた。(図13)

製造工程は、①土を人形頭部の形に型取りする、②乾燥、③素焼き、④全体を白色で下塗り、⑤頭部や顔などの着彩の手順である(図14・15)。ワークショップでは、①～③の工程が終わったものを購入し、④⑤をワークショップの参加者で制作する事とした。

絵付けの留意点として宮脇氏に確認したところ、特に制限などは無く、現物のデザイン



図12 豊泉堂で製造される大分の郷土玩具



図13 郷土玩具作家・宮脇弘至氏



図14 一文人形、頭部の型



図15 型から取り外された頭部の乾燥

に捉われず、参加者が自由に描いて欲しいとの要望があった。

### 5.3.人形絵付けの試作と告知ツール制作

ワークショップをスムーズに実施するため、携わる運営スタッフと共に試作を行なった(図16)。ワークショップ当日の制作時間は片付けを含めて1~1.5時間程度である。よって、乾燥の速度を優先事項としてアクリル絵具を採択し、また、筆は細部を描きやすい面相筆や水彩用を使用することとした。

5.2.に記載した制作工程の「④全体を白色で下塗り」は、アクリル絵の具を水で薄め過ぎず、乾かしながら幾度か重ね塗することで均質に塗る事ができた。「⑤頭部や顔などの着彩」についても同様であるが、細部については、細さと、ある程度の腰がある筆の方が着彩しやすいことが確認でき、その結果を元に参加人数分の道具を準備した。

また、ワークショップ開催にあたり告知ツールを制作した。地域における芸術文化振興を目的とした本学の年度事業である「芸短フェスタ2019」の広報用プログラム、また募集人数が少数であることから、SNSを中心とした告知を手段とした。若年層やファミリー層を中心に参加を促す為、郷土玩具の因習的なイメージに捉われずポップで明るい印象のビジュアルを目指した(図17)。

### 5.4.ワークショップについて

2019年9月16日(月・祝)12~14時に、仮宮横にある神楽殿(昭和30年代に増築)に



図16 ワークショップの試作として着彩したもの（スタッフによる）



図17 ワークショップ告知用ビジュアル

て開催した。2019年度は、実施可能スペースの都合上催しの一つとして実施したため、2時間という限られた時間の中での開催となった。運営については、本学のゼミに所属する学生からなるボランティアスタッフ及び、大分市内在住のデザイン事業に携わる井上和子氏、たなかみのる氏の協力を得た。事前予約制で定員20名程度を募集し、17名が参加した。当日の参加希望者も数名いたが、制作時間の都合により遺憾ながら受け入れ不可とした。

進行としては、はじめに、柞原八幡宮禰宜長澤氏による浜の市と一文人形に関する講話を行い（図18）、次に筆者が絵付けの手順や留意点などを説明した。その後、集合時に各参加者が選んだ素焼きの人形を土台とし、ボランティアスタッフがサポートをしながら絵付けを実施した（図19）。公開ワークショップという形式をとり、参加者以外も絵付けの様子を観覧できたため、興味深げに観覧する人、人形に関して質問してくる人、来年の参加希望を挙げる人など、様々な反応があった。また地元のテレビメディアによる取材も入り、参加した児童の様子やコメントをレポートするシーンが当日のニュースにて放送されたことも、次年度に向けてのアピールとなった。制作後は作品と制作者で写真撮影を行った。（図20～27）



図18 ワークショップ1  
[長澤氏による講話]



図19 ワークショップ2  
[筆者による絵付けの説明]



図20 ワークショップ3  
[外から見た神楽殿]



図21 ワークショップ4  
[神楽殿内の様子]



図22 ワークショップ5  
[参加者の様子]



図23 ワークショップ6  
[参加者の様子]



図24 ワークショップ7  
[参加者の様子]



図25 ワークショップ8  
[参加者の様子]

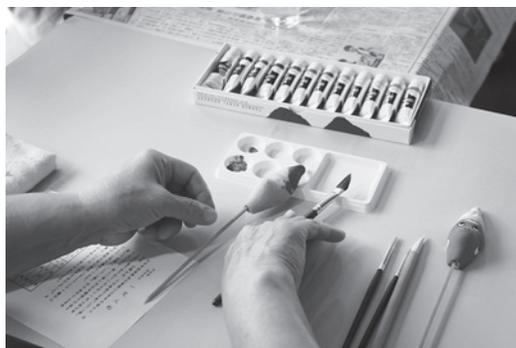


図26 ワークショップ9  
[参加者の様子]



図27 ワークショップ9  
[参加者の写真撮影]

### 5.5.ワークショップの成果（参加者へのヒヤリング）

<家族層の声>「子どもに地域の文化を体験させる機会ができて嬉しい」「いろいろな色で自由に描けて古いイメージが変わった」

<年配層の声>「昔から見ていたので懐かしい」「作る工程を知ることができて興味深い」

<祭の主催者・自治体の声>「イベントが地域住民の出し物に偏るなか、祭りにまつわる企画で意義がある」「来年も開催して欲しい」

上記の声から、地域住民が郷土玩具の制作工程に関わることで、日常生活では接する機会が少なかった一文人形や、自身が住む町の風習との接点がわずかながら生まれたのではないかと考える。

ワークショップの実施、報告を通して「開催を知らなかった」「参加したかった」等の声が挙がったため、告知方法の改善や開催時間の延長、参加定員増などの対策を検討したい。また、絵付けのために購入した筆について、種類により毛の抜けなどで下地の着彩に支障が生じた為、制作物の質を向上させる画材のチェック等の実施が必要である。

## 6. まとめ

2017年、浜の市（仲秋祭）期間中における路面店舗での一文人形販売終了をきっかけに、何かしらの対策が早急に必要であると考え、研究テーマ①地域資源として「浜の市・一文人形」の文化継承を課題として、地域住民が郷土玩具に接する機会、接点となる場を設けるためのワークショップを実施した。この事例を土台として、その土地が持つ独自の文化や歴史に関する地域住民の興味を喚起し、地域のレガシーとして価値を見出すことができるコミュニティを構築、そして地域住民自らが能動的かつ継続的に実施できる施策を構築できるかが今後の課題である。今回は、本学関係者と大分市内でデザイン事業に携わる知人に協力を仰ぎ実施に至ったが、前述の目的からも地域住民を擁して実施できる方法も検討したい。

ワークショップについては、定着に至るまで継続的に実施する予定の施策の一つであるため、改善を重ねながら、新たな展示イベント等の開催も含め仲秋祭実行委員と共に検討していきたい。

② 「一文人形」の歴史と造形に関する調査について

今回の調査でも大分県立図書館・豊の国ライブラリーや大分市歴史資料館に助力を得たが、引き続き協力を求め、途絶えたとされる大正時代以前の一文人形について、誰が何をモチーフにしていたか、素材・造形の特徴、時代における製造工程の変化等を調査し、他の地域に伝わる首人形にはない「大分・浜の市・一文人形」の特徴、定義を明らかにしたい。

③ 「一文人形」をモチーフとしたデザインの施策による文化財的存続の模索について

②の調査から「一文人形」が地域の伝統文化を象徴するキービジュアルとして土産品・名産品等のモチーフに成り得ないかを検証・企画提案したい。ワークショップの場を活かし、展開や試作、販売も検討したい。

最後に、今回のワークショップ開催にあたりご協力いただいた柞原八幡宮の長澤周一郎氏、豊泉堂の宮脇弘至氏、取材・撮影・運営に協力頂いた井上和子氏・たなかみの氏・学内スタッフ、資料提供に尽力いただいた大分県立図書館・豊の国ライブラリー及び大分市歴史資料館の皆様へ感謝申し上げたい。なお本稿はあくまで筆者個人として省察した現時点での見解として記述していることを申し添える。

引用・参考文献・参考Webサイト

- ・岡本憲幸：「郷土玩具と地域像－岡山県美作地方の泥天神の現在－」 p64,p67-68,人文地理 61(3), 249-265, 2009
- ・大分市：「歴史的風致維持向上計画令」,第2章,2(1),p65-67,p69,73-74, 2019.6
- ・宗教法人柞原八幡宮：「柞原八幡宮 建造物調査報告書」, 2010.3
- ・大分市：「大分市史 中巻」,p502-503,p508-509, 1987
- ・渡辺克己：「大分今昔」,p209, 1964
- ・甲斐光：「郷土の歴史 生石風聞録」,p120,1991.1
- ・斎藤良輔：「新装普及版 郷土玩具辞典」p24,p45-50,1997（初版1971）
- ・畑野栄三：「全国郷土玩具ガイド4」,p220-227,1993
- ・大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館：大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書 第16集「大分県の祭礼行事」大分県祭礼行事民族調査報告書, p60-61, 1995.3
- ・大分市教育委員会：柞原 大分市伝統文化調査報告書10, p13-15, 2012.3
- ・豊田寛三・後藤宗俊・飯沼賢司・末廣利人：「大分県の歴史」,p237-239,2012（初版 1997）
- ・柞原八幡宮奉賛会：「神さまの森国指定重要文化財の建造物豊後一宮柞原八幡宮」, 2013.8
- ・小玉洋美：「大分県の生業・諸職民具-昭和編-」,p262-263,2017
- ・朝日新聞 中島健：「続々よみがえる郷土玩具 別府の工房『豊泉堂』」, 2019.9  
<https://www.asahi.com/articles/ASM935QZLM93TPJB00W.html>
- ・草の根工房・菜根庵：日本全国郷土玩具バーチャルミュージアム民芸館-大分県篇・第1回-  
<http://www.asahi-net.or.jp/~SA9S-HND/agal-978-10.html>, 1999.10